

臨床心理学研究室の2002年大学祭発表ポスター

中 田 行 重

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

E-mail: nakata@po.cc.toua-u.ac.jp

下 川 昭 夫

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

更 科 友 美

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

E-mail: sara@po.cc.toua-u.ac.jp

東亜大学総合人間・文化学部の臨床心理学研究室では学生による研究会活動が行なわれている。全部で8つの研究会があり、本年度は大学祭(2002年10月25日~27日)においてそれぞれの研究会がポスター発表を行った。ここでは、本研究室における研究会活動の教育的意義を確認した上で、そのポスターを掲載する。

本研究室所属の学生は臨床心理学への関心を持っている。教育方針としてはその関心に対して出来るだけ情報を提供するのがよい、という結論になりそうであるが、ことはそう単純ではない。学生の内発的な動機付けに対し、成績という外部からの評価を持ち込むことは内発的な動機付けを薄めることになる。悲しいかな、わが国では内発的な動機付けを無視し、破壊し、洗脳し、子どもの可能性をつぶしている例は巷にあふれている。従って、出来るだけ内発的な動機付けをそのままに残すほうが良いし、教員が手出ししない方が学習の点から言って効率が良いことさえある。また、学習の点だけでなく、人間教育の点から言ってもそのほうが重要なのは、偉業を成し遂げた多くの方は自分の関心を温め続けることの出来た人であることを考

えると分かる。ところが、講義や演習、実習は、教員がどのように工夫したところで、教員から学生への一方的な情報提供の場であり、成績という外部評価が入る、という基本的な性質は変えられない。しかし、内発的な動機付けを無視し、破壊し、洗脳して変えてしまう傾向を100%取り去ることは不可能であるにしても、何とかして少しでもそれを残したいと筆者らは考えた。

ところで、卒業論文や卒業後の進路選択の指導のために、学生の関心を尋ねてみても、必ずしも明確に答えることが出来ないことが多い。臨床心理学へ何らかの関心をもって入学してきている筈なのに、である。それは、言語化そのものの能力の問題もあるが、おそらくはそれよりも、入学時における学生の臨床心理学に対する関心がメディア等で取り上げられた社会問題によって形作られた漠然としたものである可能性が高いことを筆者らは学生との面談などを通じて感じている。

漠然としたイメージだけで卒業論文や進路を考えてゆくことは出来ない。そこで筆者らは講義や演習などを通じてエンカウンター・グルー

プやトライアルカウンセリング、心理検査など出来るだけ具体的な体験を学生に提供したいと考えている。というのも、臨床心理学という学問自体が具体的・体験的な対人援助学であるからである。対人援助という人への関わりの方である限り、何よりも自分個人の他者への関わり方に関心を持ち、磨く必要がある。「臨床心理学や精神医学を専攻するのは、自分の病気を治すため」と言われるのはその辺りの事情を指しているし、精神分析が逆転移という概念で追求している大きなテーマでもある。

ところが、今は友人を作れない学生が多い。沢山のプリクラを見せびらかしたり、コンパで派手な飲み方で盛り上がりようするのは、実は友人を作れないことへの浅薄な防衛である。あるいは学生相談カウンセリングにしばしば持ち込まれる主訴の一つは友人が作れない、ということである。カウンセリングを受けるまでではないにしろ、友人関係を作ることが難しい時代になっているのかもしれない。そういう若者に身近なところで対人関係をもってもらう必要があると筆者らは考えた。

関連して、退学や休学、あるいは講義を休みがちな学生は大学で友人関係が余り作れていない印象を筆者らはもっている。やはり、講義に来て誰も言葉を交わさないで帰宅するようでは、大学に来る気持ちは失せるだろうし、体調を崩して講義を欠席した時などにノートを借りたり、情報提供をしてくれる友達もいないようではとても大学生活はやってゆけないであろう。そのような所属感のなさへの対策として、筆者らはエンカウンター・グループなどを導入しているが、それ以外にも友人関係のネットワーク作りの場があるほうがよい、と筆者らは考えた。キャンパスにおけるコミュニティアプローチである。

筆者らが研究会という形式を学生に提案したのは以上のような意義を考えてのことである。とはいえ、何しろ、これまで研究会というものがなかったので、どのようにやってゆくのか、学生も分からない。そこで、筆者らが運営の仕方や研究方法などについてお節介にならない程

度にサポートし、あとは学生の自主運営による研究会を行うことにした。そして、年に2回、各学期の終わりに発表会を行い、大学院生らにも協力して参加してもらった。また、今年度は大学祭でポスター発表を行った。それが以下の8つのポスターである（五十音順）。このうち、精神医療研究会は精神医療のテーマ別に更に細かな発表を行ったが、ここでは紙数の関係で割愛する。ポスターの書式については筆者らの1人、下川が、実際の学会発表のポスターを手本として示した。ポスターその他の資料、部屋のセッティングなど学生の健闘は相当なものだったが、その割に見に来てくれた人が少なかったのは残念であった。

アクティング・メソード研究会

アクティング・メソードとは

メソードは、舞台で実生活と同じ生活を生きる演技法である。ブラット・ピットらハリウッド映画俳優たちは、メソード演技を身に付けている。ハリウッド俳優たちの活躍で、メソード演技は最新の演技方法のように思われているが、元はロシアのシスタームであり、日本にも早く入ってきた。しかし、それが実践され広められたのはアメリカで、ニューヨーク・アクターズ・スタジオのリー・ストラッスバークなどに受け継がれている。アクティング・メソードは、リー・ストラッスバークが創案したもので、「全ての表現の基本」になるものであり、また心を開いて自然でリアルにあるための訓練法である。内面的なもの、心や感情に関わる部分の基本となる。どうしたら役の世界に入り込めるのか、自我を忘れることができるとか、観客を前に「自由に」振舞うことができるのかなどの要素の解決法の一つがこのメソードにはある。「基本的表現力」に関わるもの、例えば、集中力、持続力、何もないところからものを生み出す力、信じる心、衝動に従う力、その人の根源にある個性の発見と育成などが鍛えられる。

研究会の目指すもの

この研究会では、アクティング・メソードを基盤としたエクササイズを体験し、心と体をほぐし、感じる感覚を開放し、感じたことを感じたままに受け止め、表現することを通して、自身を見つめ直すことを目的としている。基本訓練に、心と体を感じやすい状態にするためのリラクゼーション、五感を磨くためのセンソリー、感じたことを投げかけ、受け止めるためのレベティションがある。日常生活において、私たちは自身の生活をリアルタイムで営み、リアルタイムで感じているわけだが、そこに「嘘」はないのだろうか。または「本当の気持ち」に気づいていないということはないだろうか。NHKの「さくら」という番組で、小林亜星扮する祖父がさくらに向かって言った言葉がある。「人生には嘘をつかなくちゃあいけない時がある。けどな、自分だけでは嘘をついちゃあいけない。」果たした地は日住生活を営む上で自分の本当の気持ちを醜悪化していくうちに感じることをやめてしまっってはいないだろうか。

メンバー

黒木、古賀、小谷、正、新富、鈴木

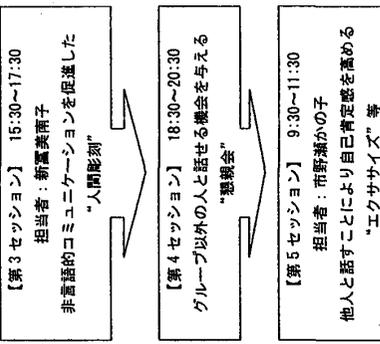
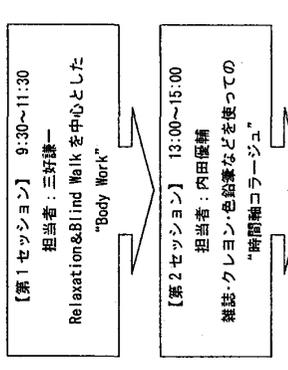
エンカウンター・グループ (Encounter Group) の活動発表!!

～触れ合いをテーマとして“自己”“他者”とは～
E6 研究会 (東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室)

はじめにおわび?

このような発表は内容も大事だがそれ以上に読むでもらわなければならない意味がない。だから簡単に目立つように(??)書いていくつもりである。つまりこの内容だけ見てもあまり内容はわからない。そのため、AA プリントを作り、セッションごとの内容やエンカウンター・グループを説明などを載せているので、それを見ながら読んでほしい。そして知っていたことなどがあつたら E6 研究会に聞いていただければ、喜んで答えると思う(多分)。もっと詳しく知りたい方は、“総合人間・文化学部”に「いらっしやーい」
平成 14 年後期エンカウンター・グループ
平成 14 年 9 月 28・29 日に東亜大学総合人間・文化学部臨床心理学研究室所属の 2 年生を対象として、構成型エンカウンター・グループ (以下 E6 と略) を行った。各セッションの詳細な内容は下にある AA のプリントを参考としてほしい。ここでは全体の流れを中心として書いていく。

第 1 セッションから第 4 セッションを 1 日目(28 日)、第 5 セッションを 2 日目(29 日) に行なった。



総括

全体を通して、重大な問題点も発生せず何とか最後まで E6 を進めていくことができた。体験した二年生の感想としては、“楽しかった” “今まで知らなかった人と知り合えてよかった” “充実感がある” “満足感がある” “素晴らしい気分になれた” など肯定的な意見が多くあげられていて、全体的に良い方向に動いていったことがわかる。また “疲れた” という意見も多く、身体的・精神的にも普段生活しているよりも活動していたことがよくわかる。もちろん改善点も多数上げられており、以後 E6 をしていく上での注意点として活用していきたい。

今回の E6 は目標としていた “自己理解” と “他者理解” のきっかけになったのではないだろうか。最後に、AA のプリントは持っていますか? まだの人は下においているから持ってきてください。いろいろと、ここにまとめきれなかった事を書いていますので、参考になりますよ!

催眠研究会

研究会の目的

現代のストレス社会に立ち向かうために、いろいろなリラクゼーション法がある中で、催眠というある意味特殊な方法があります。それに強く興味を持ち立ち上げることとなりました。

みなさんもみもみすることがあるかもしれませんが、テレビなどで興味本位に取り上げられることが多かったジョーとして催眠、こういったメディアによって作られたイメージが先行して催眠と聞くと「インチキだ」、「怪しい」などと拒絶反応を示す人も多くてはないでしょうか。しかしこれまでここで述べた催眠というイメージは、全くの誤解なのです。催眠は医学や心理学と同様、古くから多くの学者によって研究され、科学的な体系を持つ『学問』なのです。

近年では、事故の心身のコントロールや、心因性のいろいろな問題の改善が期待されることから、一般の人々の間でも催眠への関心が高まっています。そこで私たちも催眠とは何か、催眠とは医学の領域でどう扱われるのか、心理学とはどうなっているのか、などについて、詳しく知りたいと思ってきました。そこで、催眠に興味を持つ学生を募りみんなで催眠について勉強することになりました。

催眠について

催眠でなんでもできる、そう思っている人も少なくはないのではないのでしょうか。そもそも催眠状態と覚醒状態とはどのような違いがあるのでしょうか。それは意識の連いの違いです。それは意識がなくなるといったものではなく、意識状態が大なり小なり普段と違った状態になるのです。この通常と異なる意識状態のことを、変性意識状態(トランス状態、催眠状態)と呼びます。「催眠」とは、主として暗示によって意図的に変性意識状態を作り出す方法なのです。先に述べたように催眠とは普段と意識状態が違っているのですが、どういったように違ってくるのでしょうか。それは催眠状態が深くなるに従って、しだいに意識レベル

自分探しのゼミナール

(東亜大学 総合人間文化学部 臨床心理研究室)

目的

最初は、1年生の受講人数で集まり、教授を含めて話し合いを進めていきました。当時は、自分が興味のあることについて話し、その中で自分がもっと知りたいこと、研究したいことを見つけたら、卒業などにつなげていこうというものでした。そして2年生になり、今後の活動について話し合った結果、もっと多くの人の意見を取り入れたいということになりました。この研究会を活動研究会の流れ

1年生の頃のテーマは、妊娠・産後・牛乳の栄養についてなどでした。
2年生になつての頃習得は、妊娠・産後の話をもっと詳しく知るために、産婦人科の看護婦さんを招いて、話を聞かせて頂きました。妊娠や産後といった話は、多くの学生が関心を持ってたことのように、男女問わず、聴講する人々がたくさん訪れました。看護婦さんには、私たちが妊娠・中絶といった内容が書かれていた本を事前に読み、驚きや疑問となる部分をまとめてたことについて、答えて頂くという形となりました。妊娠・中絶といったことは、普段なかなか聞けない内容だったので、皆いついなくなりました。話を聞くうちに、疑問や不安が減り、また、看護婦さんから私たち学生にメッセージも頂き、本当にすばらしい経験となりました。

また宗教について話し合いをした時は、聖書を読み、内容を理解することから始めました。学校や、映画や、本等で、目や耳にすることがあり、なんとなくは知っていた聖書の内容も、改めて読み直していくと意味が分からないものや、実際は自分が思っていたものとは全く違う意味のものがあつたり、聖書の深さに気づかれました。そして、そういった屋内での活動の間で、気分転換と運動不足解消の為に、何かスポーツをしよう。ということになり、バレーボールをしてみました。バレーボールには、学部内の1年時から3年生まで、様々な人達が集まり、とても盛り上がり、話し合いばかりが自分探しのではない、ということに気づきました。

体を動かすことで、気分転換ができるだけでなく、話し合いでは経験にはない人達、積極的になれる等、自分探しの幅を広げることができました。

自分探しのゼミナールは、基本的に、ここからこまでといった枠がなく、とても自由な研究会です。自分のしたいことや、気になっていること、知りたいことを、話し合いのテーマにし、それらについて意見を言うことや聞くことをします。しかし、自由ということとは、自分のしたいこと、言いたいこと、を意味し、積極的にならなくとも、言いたいことを発言し、積極的にこの自由は、積極的になることが難しいものになつても大変なことで、研究会が苦しいものになつてしまします。実際、これが原因で研究会を離れた人達がたくさんいます。しかし、そういう人達にも、このスポーツを通しての自分探し、とても、活動しやすかつたみたいで、とても好評でした。これからも、続けていく予定です。

今後の活動

これまでと同様、日常で疑問に思ったことを持ち込んで話し合い、その疑問でのスポーツ活動をこれからの予定として考えています。そしてその中で、自分の興味を引くものが見つければよいと思つています。そしてそれが、自身を探索しやすかつたけになっていけばよいと思つています。

まとめ

自分探しのゼミナールは、このように結果が必ず出せるといふ研究会ではありません。ただ話したい、聞きたいというだけで集まっている人もいます。自分が考えたこともなかったような考え方や意見をきくことができ、幅広い知識を身に付けることができます。そして、今後によりよい活動をしていきたいと思つています。

活動メンバー

- 水村恵美 久武 穂幸
- 向井 陽 市岡 英樹
- 初倉 祥吾 和田 圭石
- 小谷 隆史 太田 崇孝
- 榎口 博之

ルが低下して頭がぼーっとしていきまます。これが催眠状態なのです。それは非常に受動的で自発性に乏しい状態です。そこで催眠者は暗示によって被催眠者の無意識とコミュニケーションを図るのです。

では催眠で何ができるのでしょうか。先に述べたとおし医療の現場でさまざまな効果を生じます。解離症状やPTSD(心的外傷後ストレス障害)のような精神障害に効果的なのです。なぜならそれらの障害は過去のつらい体験を無意識下に抑圧することによって引き起こされるもので、無意識に働きかけることのできる催眠は効果的なのです。このように催眠は実際の精神医療の現場で実用性が高く、また無補償や歯科医院での無痛下での治療など、いろいろな分野で応用されています。

研究会活動

私達は上記の催眠を知識と実践とおしで学んでいます。今までの活動では振り子法、矯視法、立位後倒法、臉のカタラレプシ一、腕の浮揚、自律訓練法、文獻による催眠についての知識の探究といったことをしてきました。

今後の目標

これまではごく深い催眠しかしておらず本来の催眠の目的である「治療のための催眠」を体現することができませんでした。というのも、そのための催眠は深く入ることが必要で、そのためには時間が必要だったのです。今後は催眠を臨床心理に対してどのよう

研究会メンバー

- 大田 宗孝 奥田 真帆 小谷 隆史
- 斎高 洋司 千田 雄也 徳永 優樹
- 齋藤 広嗣 溝畑 美紀 山影 有利佐
- 和根 山豊

精神医療研究会の活動

＝研究・発表・理解への道＝
精神医療研究会（東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室）

目的

2年生になり、臨床心理学研究室に所属し、本格的に研究会に所属することになった。様々な研究会が立ち上げられる中、私達は、おもに医療分野に重点を置いた研究会～精神医療研究会～を立ち上げた。研究会名は、何か堅苦しい感じであるが、「自由に研究」をモットーにしている。臨床心理学を学ぶ中で、精神病・疾患、治療法に興味をもつのは当然のことである。しかし、我々はよいうやく本年、専門分野として学び始めたばかりで、一人で調べたり考えたりするのは、限界がある。そこで、1人1人のベネフィットを保ちつつ、幅広く学んたり、理解する方法はないかと思ひ、今の研究会方式を取り入れた。（詳細は研究会の流れで説明）メンバーのほとんどが進学を希望しており、今後に向けての研究課題を模索することが、目的である。興味がある分野に首を突っ込んでみ、ハマれば深くのめり込み、「違ふな。」と思えば、新しいものに首を突っ込む、そうやって、自由に課題を見つけていく。我々は、学第2年というこどももあり、正式な形式、はっきりとした目的はない。今だからこそできることを、1人1人が、自分のベネフィットで行っている。

研究会の流れ

1人1人が調べて、研究したことを、メンバーの前で発表し、意見交換すること。「自由」＝個人を尊重しているので、やり方もそれぞれだが、主な流れとしては、まず、興味を持った分野の『研究案』を作成する。それを、プリントにし配布とともに予告した後、レジュメや資料を作成し、発表する。その後メンバーからの質問を受け、発表者は答えたり、みんななどで考えたりして理解する方向をとっている。発表者はミニ専門家になってみ

て、聞く者は学ぶ側になることで、分からないことを分けることができるようにしている。締め切りは無い、個人の発表日指定もしていない、1人1人が自主研究をし、それを発表する場としている。他のメンバーも、視野（興味）を広げることができ、いい機会ともなっている。前期の主な研究発表のテーマを以下にまとめる。

- 古賀 晋平 心身症一過性脳虚脱群（過呼吸症候群）
- 大森 史代 虚偽性障害
- 龍崎 広嗣 ADHD（多動性障害）
- 小谷 隆史 PTSD
- 神田 宗忍 自閉症
- 井田田美子 精神医学・精神科の現状（対処）と家族問題
- 山内 一弘 精神分断病
- 山形利佳 対人恐怖症
- 奥田 真帆 気分障害（感情障害）
- 清畑 美紀 神経症
- 原 夕紀 性的傾向・性的障害
- 秋田孝子 摂食障害 ～神経性無食慾症～
- 酒井 志野 運送と環境における性格形成
- 高村 紗世 睡眠障害

今後の活動

活動も残すところあと3ヶ月であるが、臨床心理学研究室演習の最終的目標は、研究室メンバーの前での個人発表であるので、学業の成果（健康科学研究会に展示中）をバネにし今までのベネフィットを保ち、個人発表へつなげていきたいと思う。時間がある限り、課外活動（医療関係の人の勉強会、現場訪問等）を予定している。

まとめ

我々は今だからこそできる活動を行っているます。興味がある方は、どなたでもお気軽に参加されてください。お待ちしております。

一目で心理検査のことが少しだけわかる！かも・・・？

林 裕子・市岡 英樹・白井 隆・竹下 真太郎・和田 圭右・水主村 恵美・高山 みほ（心理検査研究会）

心理検査って何？

知能、適性、学力、人格その他の心理的性質の個人差を測る手続きを総称して、心理検査と言う。しかし、それだけでは正確な診断を下せない。心理検査は、被験者の人格、ある一面について測定するものであり、そのすべてが理解できるわけではなく、これらの検査・測定は、誰かに質問が、病状によつては、これらの検査・測定だけでは診断を下すことが危険な場合もあるし、全く役に立たない場合もある。

心理検査の効き目！

心理検査を利用する場合、どのような効用があるのだろうか？心理検査が妥当性・信頼性・使いやすさのいものなら、それだけ診断の精度や、人格を理解するための情報に応じた被験者の行動傾向を診断できる。そのため、心理検査は誰かが一つ実施しても、ほぼ一致するように作成されている。

心理検査を利用することにより、比較的簡単に多方面の内容を診断でき、行動観察や面接では診断できないことも、多くの質問項目があると正確に回答することが出来る。1～2時間の短い個人面接で、来訪者に頼んでも診断、結果を判断できるとは限らない。また個人面接の場合、重要な内容を聞き漏らしたり、重複して質問したりすることもあり、能率も良いとは限らない。また、ローカルチャット、テスト、ハラム・テストなど各種の検査法テストを利用することで、無意識世界の深層心理が理解できる。テストの種類によっては、心理検査を実施するだけで被験者の意識を解決したり、悩みを解消できたりすることがある。

心理検査は危険？！

心理検査は、使い方が誤ると危険である。心理検査を誤用すると被験者を傷つける結果になることもある。しかし、正しい使い方をすれば、人の成長・発達を促すために大きな働きをする。もちろんこれを利用する場合に限界点があり、留意点も多く存在する。心理検査は、心理検査の道具であつて、治療法ではない。原則としては、教育相談などの補助的道具である。それを使いこなすには、心理検査を利用する人間の仕事である。利用者が心理検査を使いこなせず、また至らぬ意思を持っているから、どんなに精巧に作られた道具でも、危険である。例えば、学カテストによって優劣をつけたり、性格検査によつて人

を愛人扱いしたりしてはならない。あくまでも、被験者の世界を正しく理解し、教育相談などの効果を利用してあげるための一種の補助的道具として利用すべきである。

心理検査の信頼性はどうか？

現在、質問紙法、作業法、投影法を含めて数百種類の心理検査がある。検査によつては、信頼性の乏しいものもある。例えば、被験者と検査との間に信頼関係がなかりたり、被験者の受容態度を測る尺度がなかりたりすると結果が信頼できない場合がある。とくに質問紙法はその傾向が強い。それは、信頼され得る被験者が検査を受ける傾向がある。これは、回答者が「正確に書くか書かないか」の重要な問題である。また、読み書きの能力を必要とする検査は、利用できる範囲が限られるという欠点がある。

心理検査は、人間の健康な面や潜在能力の活性化に関わる臨床心理学にとって基本的な方法といえる。

最後に・・・

私たちがこの研究会を立ち上げた理由が二つある。ひとつは、医療現場や教育現場、福祉施設などで幅広く利用されている心理検査に興味を持ったからである。もうひとつは、自分たちの性格や人間性を知りたかったからである。

これまでの活動は、心理検査の知識を深めることを重点的に行ってきた。研究会を立ち上げて約半年がたち、心理検査の知識も多少は、身につけてきたと思つている。これから活動としては、心理検査、特に質問紙法による性格検査を行い、自分たちの性格について考えていきたいと思つている。そして、いままでの研究、これからの研究が卒業論文や将来の仕事などにつながることを考えている。

参考文献

- 『すべては心の中に』A・フアーマン著 細江道雄訳 北大路書房
- 『性格検査の技法』杉山謙司・堀毛一也著 福村出版
- 『心理マニピュレーション』野間誠法 鎌原雅彦・宮下和弘・大野木啓明・中沢剛著 北大路書房
- 『性格は5次元だった』村上直也・村上千恵子著 培風館

臨床心理としてのボランティア

ボランティア研究会

(東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理研究室)

目的

ボランティア研究会は、ネットを使用したボランティア活動のサポート及びボランティア活動の研究などを行うために作られた研究会である。

ネットとは東亜の学生や他の高校、短大などの学生があらかじめ電子メールアドレスをメーリングリストとして登録し、あらかじめ作られたメールアドレス (volnet@po.cc.tou-u.ac.jp) に電子メールを送ると登録者全員に電子メールが送られるという仕組みで、この学部ではこのネットをつかいボランティアの情報、その他を流しボランティアを募集している。なおこのネットは、東亜大学総合人間・文化学部下川昭夫助教授が運営している。

ネットでは流れるボランティアはおもに発達障害児の託児、身体及び知的障害者のサポート、老人保健施設への手伝い、サポートなどである。

研究会活動

今までやってきた研究会の活動はまず、前期に行われた研究発表、各団体の代表者にインタビュー、掲示物の準備、その他には人間関係基礎論の授業を使わせてもらいその授業の中で各団体の代表者に話しをしてもらうなどである。

臨床心理研究室
ボランティア活動紹介から

学生自らボランティア活動団体を組織し、保育所や学童クラブ、老人保健施設、自閉症、知的発達障害児、障害児の親の会、養護施設、などに出かけていっている。また、下川助教授によりネット、ママネットという地域で援助を必要としている人援助したい人と結びつく新しいネットワーク型に極めてユニークな組織が形成されている。演習とボランティア活動などもネットやママネットで紹介され、さまざまな面から地域での活動と臨床心理研究室がなっている。こうしたボランティア活動を通して、臨床心理学の基本である対人援助活動の方法やプレイセラピー(遊戯療法)発達心理学、障害児心理学について体験的に学んでいる。

ボランティア募集

今後ボランティアおよびお手伝いの募集は
11月2日 キラキラ☆キッズ
11月10日 子供フォーラム
11月16日 Wins of God

最後に

ボランティアに対し臨床心理としてどのようアプローチしていくかそれが今後の課題になっていくのではないかと考えている。

所属メンバー
斎高淳司 神田宗忠 小谷隆史 古賀晋平
能勢広嗣 和根山豊 千田雄也

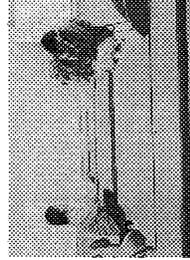
フォーカシング研究会

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理研究室
研究員 菅木一明 神田宗忠 黒木友美 斎高淳司 中田雄也 中田真 西園聖代 山内一弘 和根山豊

フォーカシング: 心理療法の一つで、「自分の身体(内面)に注意を向け自分に感じていること、本当に望んでいること」ということで、自分の中の感情的なストレスを知ることが出来たり、自分のポジティブな面を発見し、整理し前向きな性格になることを助けます。フォーカシングは身体的な痛みから立ち戻りつつある人や、慢性的な身体的な痛みから生きている人達にとっても非常に有効に活用されています。

種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。
種多様な場所で活用されています。

フォーカシングの五つのステップ
1. からだの内側に注意を向ける
2. フェルト・センスを見つける、あるいは指(A)からだテーマ (B) テーマからだ
3. 取っ手を手に入れる (描写する) 言葉、イメージ、音、しぐさを扱う
4. その感じと一緒に居る 興味や好奇心を伴った態度(あるいは optional) : それに質問する
5. 終わりにする (A) 印をつける (marking) (B) 覚える (C) 感謝する



上の写真は、フォーカシングの実験風景です